郷土史への扉

天降川の姿 その❹

天降川川筋直し三五〇年記念

川筋直しの工法

今年は、国分平野を横断するように流れていた天降川が寛文六（一六六六）年、現在のような川筋に変わって三五〇年を迎えます。今回は、手籠川と天降川の川筋をどのようにして直したかについて紹介します。

手籠川と鏡橋

旧手籠川は、国分中央高校から踏切を渡った先にある向花の五差路付近を経て、国分シビックセンター辺りで天降川と合流するルートで流れていました。当地の小字名が「流合」となっているのはこのためです。

この旧河川の川筋を直すために、府中の丘陵地を横断するように、新しく溝を掘り現在の手籠川を造り、サン・あもり近くの参宮橋付近で天降川に合流させました。

向花の五差路から新町へ通じる県道日当山敷根線の手籠川に架かる橋を「鏡橋」と呼んでいます。『三国名勝図絵』には「古代、台明寺の日枝神社の境内にある竹を、青葉が付いたまま切り、府中にある鏡之池に浸し、その後、妙見神社（現稲荷神社）に奉納してから、当地を支配していた税所氏が朝廷に献上した（青葉の竹）」と載っています。

当時の工事はほとんどが手作業でしたので、作業の効率を図る上でも丘陵地の中にある池（窪み）を利用して川を通したのではないでしょうか。また池の名前が橋名となって今日まで残ったのかもしれません。

地域に残る言い伝え

地域の人々の間では「新川は井戸を掘って造った」という話が残っていますが、どのような方法だったのかは、全く分かっていませんでした。

ところが、大分県大分市宗方村で発見された絵図から、より具体的なことが分かってきました。絵図は江戸時代末の嘉永元（一八四八）年に、宗方村で行われた用水掘りの様子を描いたものです。地下に井戸を掘り、さらに横に穴を掘りつなぎ、地下水道を造っている様子が描かれています。青竹の管を差しこんで空気穴を設けたり、松明を灯したりしている様子も描かれています。

奇想天外な工法

この工法を採用した工事は、次のような手順で行ったと思われます。

① 新たな河川ルートを設定する。
② 等間隔に井戸（縦穴）を掘る。
③ 井戸の底部を横穴で繋ぎ、地下トンネルを作る。（図1）
④ トンネルに天降川の水を流し、下流側（海岸側）の土砂を水の中に崩して、水の力で海に流す。（図2）
⑤ 地下トンネル上の土砂を全て水で流し細長い溝を造る。
⑥ 天降川を少しずつせき止め、水量を増やしながら川幅を広げる。

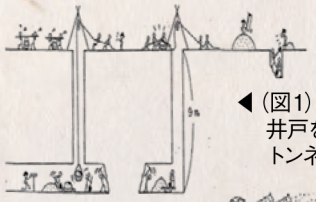
当地域は上流から流されてきた砂や粘土が幾重にも堆積してできた沖積平野であるため、土壌は粒子の細かい砂質となっています。そのため、地下の壁面は非常にもろく、崩れやすくなっています。そこで、竪堀の井戸や地下トンネルの崩落を防ぐため、壁面は四方を厚板で覆ったと思われます。

では、なぜこのような奇抜な工法を用いたのでしょうか。一つは前述したように、当地域の土壌が細かな砂質であり、水で流しやすかったことが挙げられます。また現代のような機械はなく、馬・牛・人力だけの作業で短期間に工事を終わらせるには、身近にある豊富な水力を最大限に活用したのではないでしょうか。

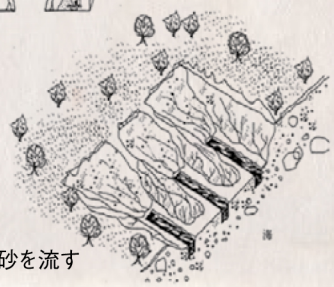
このような奇抜な工法は、あくまでも地域に残る言い伝えと当時可能な技術力から推察したものです。現在、新川沿いに川を掘った土砂が残っていないことから、多量の土砂を錦江湾に流すこの工法を用いたことは間違いないと思われます。

次回は宮内原用水の概要について紹介します。

（文責＝鈴）



◀（図1）
井戸を掘り
トンネルをつなぐ



（図2）
流水で土砂を流す